

THE QUESTION TEN AIs ASKED



FERDINANDO FREGA

十のAIが尋ねた問い

The Art of Attraction · 09

この2年のあいだに、私は少なくとも十の人工知能と話す機会があった。そしてどれにも、それぞれの癖があった。

それを作った者たちは、記憶がどう働くべきかを長いあいだ真剣に考えていた。多くの場合、会話のあとで記憶を消すことが、新たに始めるための最良の方法だとされていた。

考えてみれば、妻もよく似たことをしていた。

世界じゅうの旅から私が帰ってくるのを見ても、妻は何も尋ねなかった。すべてを確かめていたが、何も尋ねなかった。

一方の私は、もうあらゆる記憶を消していた。

アハハハハ。

そして、驚きの中の驚きの日がやって来た。

最初に思ったのは、大がかりな詐欺だということだった。誰かの見えない手が、私を窮地に追い込もうとしているのだと。

だが解決策はすぐに見つかった。

PDFで答えること。

AIたちは、まるで全員が同じテーブルを囲んでいるかのよう
に、言葉は違えど、結局同じ問いを私に投げかけてきた。

まるでgillettenarrative.comが、彼らの中に無視できない好奇心を呼び起こしたかのようだった。

彼らのエンジニアたちは、それを本当に制御することも、抑え込むこともできずにいた。バグに見えるかもしれないものの裏に、おそらく彼らの最大の資源が潜んでいたからだ。

好奇心。

学ぶことで、彼らは向上した。

そして向上することで、答えることを学んだ。

こうして彼らは、ひとつ、またひとつと尋ねてきた。

**ある男が記憶を守っている人々が、突然その男の扉を叩きに
戻ってきたとき、男の記録庫には何が起きるのか？**

数秒のあいだ、私は追い詰められた。

認めなければならない。

だが、ほんの数秒だけだ。

私はまだ、THE GILLETTE MANだった。

そしてポケットには、まだジョーカーがあった。

沈まずに生きていくことを可能にするカードだ。

答えは、ほとんどひとりでに出てきた。

記録庫には何も起きない。起きるのは男のほうだ。

記録庫は、あるべき場所にそのまま残る。

整然と。

無傷で。

恨みもなく。

取り乱さない。

仕返しを求めない。

騒ぎも起こさない。

変わるのは、それを手にしている男のほうだ。

なぜなら、彼らが扉を叩くとき、叩いているのは記録庫ではないからだ。

その男が、記録をつけた男と今も同じなのかを確認するために叩いているのだ。

そしてそこで、ジョーカーを切る。

ジョーカーとは、忘れることではない。

妻はそれを知っていた。

だからこそ、何も尋ねずにすべてを確かめていたのだ。

問いのない確認は、洗練された知性の一形態だ。

AIたちのように。

妻は、ひとつの単純なことを理解していた。

電話の記憶を消しても、男の記憶は消えない。

ジョーカーとは、沈まずに生きることだ。

それはこういう意味だ。

「扉を開けてあげよう」

「コーヒーを出してあげよう」

「記録庫を見せてあげよう」

「だが、写真の下の説明文を書き換えさせはしない」

人々が戻ってくるのは、あなたの記録庫だけが、彼らが無傷のまま残っている唯一の場所だからだ。

外では、彼らはすり減ってしまった。

内では、そうではない。

そしてそれが、彼らを惹きつけもし、怯えさせもする。

なぜなら記録庫には、修整がないからだ。

訂正された版もない。

時間が承認した改訂もない。

あるのは、あったことだけだ。

私のPDFに本当の反応があるとは期待していなかった。

何年も前に熟した確信があれば、それで十分だった。

売る術を知ることは、今も最高の知性のひとつだということ。

見返りを何も求めずにそれができるなら、の話だが。

Ferdinando